

正宗白鳥

モウパッサン

—「女の一生」—

モウパッサン(二)

—「女の一生」—

(一)

幾つかの短篇を読んだあとで、「女の一生」を手にとった。手許に英訳本があったので読む気になったのだが、全部を読むのは厄介な感じがして、真中どころを開けて漫然と拾い読みをはじめた。ところが、二三ページ目を注いでいるうちに、心はおのずから作中に引込まれて、最後まで読通すことになった。久振りに面白い小説に接

したような感じがした。この小説を私は、今から殆んど四十年も前、明治四十二三年の頃に、はじめて読んだ筈であるが、あの時よりも今度の方が身に染みて感動させられたようである。この作者の最初の長篇で、青春期の作品であるが、老衰の境地に達した私が、こういう青春の作品に心酔するのだから、芸術は不思議なものである。こういう種類の小説こそ、いつの世如何なる国に於ても、多数者に愛読されそうである。英国に留学していた島村抱月が、日露戦筈の終わった時分に帰朝して、私などに向って西洋文壇について話していた時、モウパッサン

の「女の一生」という小説の新訳が毎日ロンドンの本屋の店頭に堆高く置かれて、それが見る見る売れつくすことを話していた。原作の出版当時は、作品の性質が不道徳であるという理由の下に、停車場の新聞売店で売るところとは禁止されていたそうだが、道徳性を尊重したがる英国でも、一般の小説好きは、多少不道徳調のある作品を好んでいたのであろうか。

早くから人世に幻滅を感じていたらしいモウパッサンは、最初の長篇小説を案出するにも先ず幻滅の経路幻滅の人生光景を想像裡に浮べたのである。それに、希望

に満ちた豊かな生活から次第に落魄の道を辿る筋立が、物語として読者の心を惹くのは、古今東西の当例のようであり、モウパッサンはその読者の心理をよく心得ていたのである。彼は「脂肪の塊」で売出して諸方の出版業者から原稿を求められていた時「女の一生」執筆の計画は出来ていて、その一篇の大意についてはフロオベルに話して、ひどく賞讃されていたのであった。しかし、生活を顧慮していた彼は、短篇によって手っ取り早く原稿料の得られるのを便利として、容易に長篇には着手しなかつたのだそうだ。新進作家として名声群を抜いてい

た彼は、筆の力で多額な金を産出し得られることが明かになっていったが、それでも彼は大成功の夢に酔うことはなかった。見窄らしい貸室に住み粗末なたべ物屋で食事しながら「女の一生」を書いたのであった。一朝にして文壇第一の人気作家のようになり、身体も頑健であり、青春を思う存分に享樂し得られる境地にありながら、人間のはかなさを描き徹そうとしたのは何故か。「女の一生」は、あり振れた一人の女の生涯を叙述しているのであるが、作者の意図も、読者の受ける感銘も、それはいろいろ異なる人間の生涯の表現であり、あらゆる人間の夢の

はかなさを描き出したものである。人間の夢のはかなさが、美しい絵のようにそこに描かれ、快い音楽のようにそこに唄われていると云ってもいい。そして、全篇を貫いている幻滅観は、モウパッサンが物ごころのついて以来持っていたもので、それが作品をして真に徹したものでたらしめるのであろうと、私は宗教信仰同様に、モウパッサン文学について信仰していたものである。しかし、相手がキリストであらうと、モウパッサンであらうと、地上の生存物については懐疑を持って接し得られるのである。

老いたる私は、外国の一青年の書いた「女の一生」を
読んで、芸術味豊かな哀愁の感を享樂するとともに、自
分の心魂が薄ら寒い風に吹きつけられるような気持もし
たのであるが、しかし、小説は要するに、絵そら言であ
るとも思われる。純良な一女性ジャンヌを次第に孤独の
境地に追い詰めて、人の世のはかなさを現わしながら、
結末に、彼女と因縁の深い乳姉妹のロザリーと云ったよ
うな女を連れて来て、彼女の落魄の惨状をいくらか緩和
するなんか、読者を喜ばせる小説的用品の一つであって、
真実のジャンヌは、自分の夫の種を孕んだ女の保護なん

かは受けしないで、野垂れ死をしたのであったかも知れない。人生の幻滅観を徹底すればそうなるのだが、それでは小説の世界としては興が乏しくなるのだ。ジャンヌの母親が、死後に、娘ジャンヌによって秘密の手紙を見られて、これも貞操を守り得なかった女の一人であったことが証明されるのだが、これなんかモウパッサンの早くからのマンネリズムで、こういう趣向はしまいには鼻につくのである。

モウパッサンの厭世主義も、彼の文学的成功の一つの要素であつたと云われる。人間の多くは、自分の存在に不満の思いを抱くのを常例として、自然の恩沢に対して感謝の思いを寄せることは稀れであり、事に触れて泣き事を云いたがるのである。自分達はこの世に於て不当な取扱いを受けていて、さまざま歡樂の分配から除外されていゝと思わぬ男女は稀れであると思つてよかろう。それで、有名な作家が、現世の不公平や残酷を作中に活写

して厭世調を漂わせていると、読者は自分の心の代弁者として喜ぶのである。たとえば境遇に満足している人間でも、山葵が刺身の味を増し、果実の皮の苦い汁二三滴がシエリー酒に味を加えるように、多少の厭世感を抱くことによつて生存の興味が一層豊かになるのである。シヨツペンハウエルはモウパッサンも読んだそうだが、この厭世哲学者は、充分に人生を享樂して、快樂主義者エピキュラスよりも一年だけでも生延びたのである。

モウパッサンの厭世觀は、対人世対文学の彼の姿勢の一つであつたと云つていい。一つのポーズであつた。由

来厭世家というものは、真実の苦情不平を心に保っていて、事に触れて強烈な感じを起すものである。が、モウパッサンは、不断何事についても左程強くは感じなかつたと、彼の知人が彼の死後に噂していたそうだ。彼の葬式後間もなく、アンリチエールが、ゴンクールと食事を共にしている間の話に、「あんな呑気な男は外に無かつた。何事にも無頓着であつた。何かに対して最も熱烈に興味を有っているらしく見えた時には、もうそれを棄ててしまっていた」と云っている。ラメートルも「彼の厭世観は根拠のない事であり、信じ難いことである」と記

している。

モウパッサン自身が、青春の頃すでに厭世厭人の感じを吐露して、「この短いような長いような人生も、時としては堪え難くなる」と訴えているほどだから、一種の厭世家にはちがいがなかったが、人の世の無常を感じて、出家遁世を志すような、兼好法師好みの厭世とはちがっていた。浮世のはかなさを描いた、「女の一生」によって、名誉と金銭を獲得した彼は、住み心地のいい家を新築したりして、物質的栄華を享樂することに躊躇しなかった。そして、彼は次第に一人の女性だけを愛すること

は不可能になりだしたと告白したりしている。「自分は千のかいな、千の唇、千の何かを有ちたいと思っている。可愛らしい一群の生物を、ときに抱擁したいのだ」と、空うそ吹いたりしている。しかし、こんな景気のいいことを云ったあと、彼は心細い事を云いだしたのだ。病理的结果であると云われている。独居を恐れだしたという告白なのだ。しかし、この頃では独居恐怖症がまだ致命的境地には達していなかったもので、彼は傍観態度で話している程度であった。一人で過す夜の怖さに堪えられないために結婚しようとしている男を仮設して、自己の心

境をその男に托して表現した。晩年には、彼の作品に現われる恐怖がもつと主観的となつているのである。「女の一生」のような堅実な作品を述作したモウパッサンが、次第に道德無視の墮落した作品を書くようになったのは、流行作家になつたためである、トルストイは遺憾に思っているが、流行作家になつて出版業者に濫作を強要された結果と云うよりも、作者の頭脳が次第に健全性を失いつつあつたためである、と云つてもよからう。それにしても、「女の一生」のような、彼の作中では最も純潔である筈の作品ですら、不道德の作品として、停車場

の新聞売店では禁止されていたと、伝記に記されているのが本当だとすると、不思議である。あの頃のフランスは、それほど道德の標準できびしく文学を律していたのか。一般民衆に対する小説の感化力を恐れていたのか。その点では今日の日本の方が却って寛大であるように想像されて、奇異に感ぜられる。

(三)

五歳ちがいの兄ピエールと弟ジャンとが、学問修業を

していた都会から田舎の両親の家に帰省している間に、ある夜知合いの弁護士が訪ねて来て、或人の遺言によってその遺産がジャンに贈られることになっていると知らせた。それは意外な事であった。さしたる資産のないこの家族に取っては、甚だ喜ばしいたよりであったが、これが平地に波瀾を起す原因になったのだ。遺産贈与の恩恵にあずからない兄のピエールには、晴天の霹靂のようになりに響いたのであった。弟だけが俄かに富める人になるのだ。遺言の主が特に弟を眞眞にする理由が分らない。長い年月音信のなかつた昔の知人が、死に際して、

弟にそれ程の親しみを寄せたのは何故か。彼はそれに疑を挿んで、さまざまに考慮し煩悶する。家にじつとしているのに堪えられなくて、独り町をうろついて気を紛らそうとするようになる。偶然の知合である外国から来た或風変りの男に会って、その遺産事件を話すと、その男も怪んで、暗示的の口を利いて、ピエールの心を動揺させる。或喫茶店で知合いの女給にその話をすると、彼女はそれを面白がって、「そう云えば、あなたは弟さんとは顔立がちがっている」なんて、いやなことを云って、ピエールの心を乱すのだ。それやこれやでピエールも母

親の過去の身持に疑いを起すようになる。彼の心理研究は微細に渡っている。

「愛のない生涯。若い女が愛無くして生きていられるであらうか。みめよき若い女が、パリに住みながら、小説など読みながら、情熱に死する舞台の人物に心酔しながら、若い時から老いるまで、一生に一度も心を動かさないで、堅実に身を保つという事があるべき事か」彼はどの女についてもそういう事は信じられなかった。そうすると、母親だけが、外の女と異なる筈はない訳だ。それで、母親を見る彼の目は次第に探偵的になりだして、母親も

また彼の目を恐れだした。

モウパッサンの「ピエールとジャン」は、こういう事件で話が進むのだが、全体の趣向は簡単であり、ピエールの心理の動揺の叙述が大部分を占めているに關わらず、読みかけると、作中に引込まれて、しまいまで読通さずにはいられないような、無類の作品であると云つていい。「女の一生」が、女性としての人生幻滅の物語であるとする、これは、男の幻滅を叙したもののようである。この物語製作の動機は、彼の知人が自分の家族の老友から財産を譲渡されたことを聞いたためであった。

知人の父親が老人であり、母親は若くて美しかったこと
によってモウパッサンは、財産贈与の理由を解釈せんと
したので。モウパッサンらしい解釈である。しかし、こ
の小説は、私に取っては、軽井沢で、近づく冬を知らせ
る晩秋のつめたい風に吹かれているような淋しさが連想
される小説である。芭蕉の俳諧にあるような風流な淋し
さではなく、甚だ無風流な幻滅感である。作中の父親は、
「町内に知らぬは亭主一人」というお目出たい人物で、
西洋のいろいろな作家によって侮蔑される種類の男子で
あるが、ピエールはこの父親よりももっとみじめである。

みじめな人間として取扱われている。弟の幸福に対するジエラシーがのた打ち廻っているのだ。母親の身持がどうであつたにしろ、それを重要な問題らしくしているのは、自らを欺いているようなもので、根本は弟に対するジエラシーなのだ。しかも作者モウパッサンは、金銭の外に女性関係の事にも弟の方に恵みを与えて、ピエールを悲境に突落している。アメリカ通いの汽船の船医となつて新しい生活をはじめることには就いても、作者は祝福を与えてはいない。「おれはそんな不透明な遺産なんかを有難がらないぞ。おれはおれの腕を頼みにしている。

よく見て居れ」というような励みを、モウパッサンは、作中人物に与えてはいない。孤独の淋しさに震えながらピエールは悄然と放立つのである。誰れかから遺産を貰う話は、西洋の小説では一般の読者の興味を惹く好題目であり、有振れた趣向で、珍重するに足らない筈だが、モウパッサンの「ピエールとジャン」は、材料は有振れたものであつても、出来上つた者は類を絶しているように私には思われる。ポール・ブルジェの心理小説にモウパッサンはいくらかかぶれていたそうだが、前者の哲学的心理描写と後者の生物的心理描写とは、物それ自身

が異っているのである。

「ピエールとジャン」英訳本の終りに、鉛筆で、「長篇中最も感動せしもの」明治四十二年某月某日と記してあるが、殆んど四十年も前に読んだ時よりも今度の方が一層つよく感動したのじやないかと思う。若いジャンの幻滅ぶり、孤独の心境がわが事のように思われるのは何故であろうか。モウパッサンの作品に現われる厭世調は、むしろ卑俗であり、しかも救いのないものらしいのに、それに心惹かれて、知らず知らず同感共鳴を覚えているのは何故であろうか。「彼の厭世観は、モンテーヌから

アナトール・フランスまでを貫く哲学的厭世主義ではない。またシャトールブリアンのような詩人的の絶望観でもない。スタンダルのような明朗な不信仰でもない。ルコント・ド・リールのような高雅な自己抛棄でもない。彼のはもっと肉体的のものなのだ。情慾や食慾のために七顛八倒の闘いをつづけ、死や病に反抗する人間動物の哀れな行動、嗤うべき行動から感ぜられる厭世観なのだ。人間の遺伝性や進歩を信ずる現代の楽天家とは異り、生れのいい、育ちのいい人間からも馬鹿や野獣や酔いどれや親殺しや、淫売婦が生れ出ることを彼は検討して世に

示している。ナナのような人間が必しもルーゴンマツカール家のような血の汚れた家族から現われるとは限らないと云うのである」と、或論者が云っている。

私がモウパッサンの作品に特別に心惹かれるのは、彼の書振りが外国の読者にも判り易いように明晰であり、全体の作風に通俗向きの面白さをたっぷり湛えているためであるか。色っぽいとともにも、狂的分子のあることが、彼の作品をして十二分に鑑賞価値あらしめる所以であるか。私小説らしくなく、作品に自分を隠して客観性豊かであるとともに、一方で自己の主観を強烈に表現すると

ころに、作家としての偉大さを我々に感じさせるのであろうか。「私がいい気持で、世間の人を面白がらせていると、あなたは思っている。ところが、太陽の下で私ほど気を腐らせている人間はないのです。身体を疲らせ骨を折ってまで手に入れたいほどの価値のあるものは、世に一つもないのです。私は果てしなく気を腐らせている。安息もなく、希望もないのです。私は何を求めんともせず、また何物をも期待しません。自分の力でどうにも変えることの出来ないことを泣いて見たって為方がないではありませんか」と云ったような感想を絶えず吐露して

いる。女性に宛てた手紙にも屢々、こう云った種類の感想を書いている。

こういう感じは、永久に、文学なんかの好きな人間の心に訴うるところがあり、十九世紀末の文学にその趣きが見られるばかりでなく、現今の文学でも将来の文学でも、形式や表現の方法は異つても、痛切にそれを現わさんとするものであろう。

しかし、こういう傾向の文学は、今日一般的に盛んに云われている文化運動の主旨に適応しない訳である。今日の文化運動の精神に相応した文学は、旧套を脱して新

にならなければならぬことになるのだ。「自分の力でどうにも変えることの出来ないものを泣いて見たって為方がない」「骨を折って、現代の変更を企てても為方がない。何物を期待してもいけないと云ったような考えは、現代の文化精神を標準にして云えば排斥すべきもので明朗快活にして、近所にか遠方にか、希望の光が輝いていると、自から信じ、他を信じさせるような文学が続々出現することこそ望ましいと云わねばなるまい。理屈はそうであり、文学も政治経済或は宗教などとも歩調を一にしななければならぬ筈であるが、しかし、人間努力の効なきこと

を表現したような文学が、いつの世にでも、明朗的楽天文学よりも、人の心を惹きそうに思われるのは何故であろうか。これ等、私に取っていつまでも解決されない問題である。

モウパッサンのような流行作家でも、純芸術と通俗芸術とを区別していたのは意外であって、「ピエールとジャン」出版の時母親に宛てた手紙に、「この小説は文学として成功するでしょうけれど、商品としてはそうは行かぬでしょう。かねてあなたにお話しした通り、この作品はいいものと確信していますが、手きびしく苛酷に書

いてあるため、売行はよろしくないと思われます。それ故私は出版業者から生活費を取ることは当てにしないで、芝居に筆を執ろうかと思えます。営業として脚本を書いて小説の方は売行など眼中に置かないで、自分の好きなように書きたいのです。若し私が芝居に成功したなら、穏かに眠れるでしょう」と書いたりしている。

あれほど読者受けのしそうな面白い小説を書きながら、商品としての適否を疑って、芝居で儲けようと考える作家心理も不思議である。兎に角、モウパッサンでさえ、読者と妥協しない純文学と通俗芸術とを考慮してい

たのは不思議である。「ピエールとジャン」は兎に角、
「女の一生」なんか、充分に読者受けを考慮して作られたのにちがいないのだが、彼の頭が変調を帯びるようになるとともに、彼は、愚昧な小説読者なんかの御機嫌を取ることが厭わしくなりだして、読者無視で自分の思う存分の事を書きたい慾に駆られるようになったのかも知れない。彼の全作品の製作年月は私には分らないが、「ピエールとジャン」以後の作品は、前期のよりも、苛酷無慈悲に作中の人物を取扱うようになっていくかも知れない。この小説執筆後彼は二度目のアフリカ旅行をしたの

であつたが、旅中に旧知のテーヌに会うと、テーヌは、かつてフローベルの家で会つたモウパッサンとは様子が著しく異っているのに驚いて憂鬱なる牡牛という綽名をつけた。

(四)

「欧羅巴風のものを自分等の生活の中に取り入れる上に於て、勢い私達は入り易いものを尊しとして、入り難いものをつまらなく思い易い。しかし私達の入り難く閑却し

易いもので硬質な好いもののあることも思つて見ねばならない。例えば、絵画の方で云つて見るならば、セザンヌ又は入り易いとしても、ドラクロワは入り難い。又例えば、文学の上で言つて見るならば、モウパッサンは入り易いとしてもユウゴオは入り難い」と、島崎藤村は、昔の随筆のなかで云っている。しかし、ユウゴオのものは、仏蘭西文学のうちでは、最も早く日本に入つて、比較的広く読まれていたのである。私なども、森田思軒の翻訳によつて「探偵ユーベル」や「懐旧」などを愛読した。「レミゼラブル」は黒岩涙香の翻案によつて一般に広く読ま

れた。「入り難い」というのは、その作家の真意を理解することが六ヶしいと云う意味なのか。ユウゴオだのモウパッサンだのは、日本の小説好きにも、最も面白く読める外国小説であり、作家の作風だって、作中に潜んでいる真意だって、外国の作家評論を一つ二つ読んで参考にすれば大抵見当がつくのである。入り難く解し難いのは、ユウゴオやモウパッサンや、その時代の作家の作品よりもむしろその以後の作家の作品である。私などの頭は、昔の小説に馴らされていて、最近のものは、心に入り難く理解し難くなっているのである。そればかりで

はなくって、小説という文学様式は、十九世紀のフランス文壇などで頂点に達しているのです、その後の作家は、末流と云っていいのではあるまいか。

日本文学電子図書館

モウパッサン(二) — 「女の一生」 —

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：「白鳥全集」第7巻、新潮社

昭和42年5月30日 発行

昭和51年8月30日 セット版

日本文学電子図書館